YUYANXUE
YANJIU LILUN YU FANGFA

语言学研究理论与方法

言語学研究の理論と方法

李晨 著

西南交通大学出版社
SWJUP Http://press.swjtu.edu.cn

H36
71
北京中医学院图书馆

言語学研究の理論と方法

语言学研究理论与方法

李 晨 著

中医学院 0658590

西南交通大学出版社
・成 都・

图书在版编目（CIP）数据

语言学研究理论与方法：日文 / 李晨著. —成都：西南交通大学出版社，2014.1
ISBN 978-7-5643-2762-0

Ⅰ. ①语… Ⅱ. ①李… Ⅲ. ①日语－语言学－研究 Ⅳ. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2013）第 274314 号

言語学研究の理論と方法

语言学研究理论与方法

李　晨　著

责任编辑	祁素玲
特邀编辑	孙尚娴
封面设计	何东琳设计工作室
出版发行	西南交通大学出版社 （四川省成都市金牛区交大路 146 号）
发行部电话	028-87600564　028-87600533
邮政编码	610031
网　　址	http: //press.swjtu.edu.cn
印　　刷	成都勤德印务有限公司
成品尺寸	148 mm × 210 mm
印　　张	9
字　　数	326 千字
版　　次	2014 年 1 月第 1 版
印　　次	2014 年 1 月第 1 次
书　　号	ISBN 978-7-5643-2762-0
定　　价	36.00 元

图书如有印装质量问题　本社负责退换
版权所有　盗版必究　举报电话：028-87600562

前書き

本書の目的は、言語学初学者を対象にして言語学の研究対象、研究領域、研究理論と方法および日本語言語学研究の様子を紹介するとともに、言語学研究の実質の概念や方法論についてわかりやすく説明します。それに、言語研究のもたらす新しい知見を、様々な言語データの分析を通して心（脳）と言語、母語の獲得、言語主体の言語運用と言語認知などを理解することを目的とします。大学院入試のための試験準備にも、言語学の基礎を築くことにも一助とするものです。

さらに、言語の普遍性理論と知識を深めるとともに、音声言語や文字言語などの各言語分野および個別言語についての観察・記述・分析の方法を身につけ、その修得を卒業論文研究として目に見える形にすることが求められます。これから、大学院に進学する者、教師や公務員（コミュニケーション力アップの語用論）になる者、企業で活躍する者（ことばの場理論によることば使用別）に役立つ本だと思います。

言語研究の最前線において英語の統語分析に主要な関心が向けられていた一時期の後、最近10年間は、広範な諸言語学の研究諸理論と領域にわたって方法からデータ使用まで言語の普遍性的な諸問題に対する関心が著しく増大し、研究を深めてきました。このようなパラダイムにおいて、言語学の諸分野にわたる枠組みの中で非常に多くの研究がなされてきたにもかかわらず、今日まで、言語学の各アプローチの主要な特徴を一般的に概説する本が多かったところに、本書は言語学研究の各アプローチを総合的に分か

りやすく扱おうとした指導書を目指しています。そのため、まったくの初歩の段階から、個別のテーマに関して論文の形で専門家の書いた文献を読むよりは、言語学の一般論と方法を理解する力を補うため、この隔たりを埋め、上級の大学生および大学院生に対して、言語学研究諸理論と主要な方法および言語学の研究分野に対する現在の主要なアプローチの概観を与えようとします。

本書は３つの章をもって展開されます。第１章言語学の理論方法には、歴史言語学、構造言語学、機能言語学、認知言語学、コーパス言語学の諸理論の形成と研究の流れを概説します。第２章言語学の研究分野には、音声学と音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、言語類型論の各論点と着手点について研究実例を取り上げてその研究の実態を説明します。第３章日本語言語学研究には、現代日本語四大文法の代表である山田文法、松下文法、時枝文法、橋本文法の解説を主とするほかに、現代日本語文法について独自の主張をもつ三上章の「主語廃止説」や、言語における普遍と特殊といった奥津敬一郎の「ボクハウナギダ」の「うなぎ文」に持たれる「述語代用説」などの研究成果を挙げて解読します。

第３章の「通時的な語の変化と共時的な語の差異」の節には、現代日本語文法に対する前節の日本語言語学者研究の醍醐味を味わう上に、本書著者の小論「サ変動詞スルの活用形態と方言音韻」と「カ変動詞クルの一段化活用」の２篇を加わって議論します。そして、サ行特殊変化動詞スルの「五段活用ス、上一段活用シル、下一段活用セル」、カ行特殊変化動詞クルの「一段化活用キル（茨城地方）」や「行く→イキール（中部大垣地方）」の古語型残存や地域的共存の実例を取り上げて「ウ段」から「イ段」への変化の実態をめぐって論説します。

付録には、付録１「言語学用語解説」では、本書に出る用語の解説や言語学関係の主要な用語の解説が収録されています。付録２「日本語研究のためのコーパスと分析ソフトウェア」には、web上に無料使用可の分析ソフトウェアのダウンロード方法と使用方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

法を解説する上に、それによるコーパス言語学研究や語構成分析などのパソコンに頼る便利なツールとソフト操作がすばやく使えるように説明しています。

最後に、本書に取り上げられた内容構成は日本語科の学部生と院生を対象とする３回（3 年度分）の講義実践をまとめて整理したものです。講義の中の理論説明、内容構成順序、ワープロミスなどの不備のところに学生さんからと相関科目の教師の方々から有意義な助言を多数いただきました。ここで再び感謝を致します。

李　晨

2013.9.26

目　次

第 1 章　言語学の理論方法 …… 1

1.1　言語学研究の対象 …… 2

1.2　比較言語学 …… 4

1.3　構造言語学 …… 11

1.4　機能言語学（機能主義言語学） …… 47

1.5　認知言語学 …… 54

1.6　言語地理学（linguistic geography） …… 71

1.7　コーパス言語学（corpus linguistics） …… 74

第 2 章　言語学の研究分野 …… 90

2.1　言語学研究のプロセス …… 90

2.2　音韻論（phonology） …… 92

2.3　形態論（morphology） …… 104

2.4　統語論（syntax） …… 110

2.5　意味論（semantics） …… 129

2.6　語用論（Pragmatics） …… 146

2.7　言語類型論（linguistic typology） …… 168

第 3 章　日本語言語学研究 …… 179

3.1　現代日本語文法 …… 179

3.2　三上章「主語廃止論」……200
3.3　通時的な語の変化と共時的な語の差異……204

付　録……225

付録 1　言語学用語解説……225
付録 2　日本語研究のためのコーパスと分析
ソフトウェア（2012 年の時点）……263

参考文献……272

第 1 章　言語学の理論方法

過去五百年間に全世界の言語のおよそ半数がすでに絶滅し、今世紀中に現存する言語（5000～6700 語）の少なくとも半数がさらに消滅すると予想されている。言語多様性は文化多様性にほかならない。したがって、言語の絶滅は文化の絶滅を意味する（島村宣男　訳 2001）。

下の表 1.1 は世界の主要 10 言語のネイティブスピーカーの数が多い言語の一覧である（母語話者 1 億人以上のものより）。

表 1.1 世界主要 10 言語ランキング[1)]

順位	言語	語族	話者数
1	中国語	チャイナ・チベット語族	母語話者約 13 億 7000 万人（2000 年 WCD）
2	英語	インド・ヨーロッパ語族-ゲルマン語派	母語話者 5 億 3000 万人（2005 年 WA）
3	ヒンディー語	インド・ヨーロッパ語族-インド・イラン語派	母語話者 4 億 9000 万人（2005 年 WA）
4	スペイン語	インド・ヨーロッパ語族-イタリック語派	母語話者 4 億 2000 万人（2005 年 WA）
5	アラビア語	アフロ・アジア語族-セム語派	母語話者 2 億 3000 万人（2005 年 WA）
6	ベンガル語	インド・ヨーロッパ語族-インド・イラン語派	母語話者 2 億 2000 万人（2005 年 WA）
7	ポルトガル語	インド・ヨーロッパ語族-イタリック語派	母語話者 2 億 1500 万人（2005 年 WA アンゴラの人口の 60%を含む）

续表 1.1

8	ロシア語	インド・ヨーロッパ語族-スラブ語派	母語話者 1 億 6000 万人/総話者 約 2 億 7000 万人
9	日本語	日本語族	母語話者 1 億 2500 万人
10	ドイツ語	インド・ヨーロッパ語族-ゲルマン語派	母語話者 1 億 500 万人

最終更新 2013 年 8 月 17 日。

1.1 言語学研究の対象

言語学は、人間の言語を研究対象とするものである。言語の特性からみれば、日本語や英語・中国語などの個々の言語にそれぞれ固有であると考えられる特性と、これら諸言語に共通であると考えられる特性との二つに区別することができる。言語学の研究自体もこのような個々の言語の研究を課題とする個別言語学と、言語理論や言語の普遍性、言語類型論などを課題とする一般言語学との二つに分けられる。両者は密接に関連し、表裏の関係にある。

言語学本来の研究は、言語の内部構造（音韻・文法・語彙）についての記述・説明であり、具体的な言語形態から離れられないものである。一方、話し手や聞き手、状況との関係におけるその運用や言語の機能の面も、言語学の大きなテーマとなる。さらに、社会言語学、心理言語学、認知言語学などの分野関連からわかるように、現在の言語学の領域はきわめて広く、また、認知脳科学などのさまざまの隣接科学と結びついて、学際的に言語の諸相への認識を拡大しつつある。

言語学の分野の広さを考えたら応用されている分野には、パソコンのサイトを翻訳するソフト、ロボットに声を出させる機械、失語症の患者に対する治療、などといったものも言語学の一部になる。人間は「ことば」によってコミュニケーションを行う生き物である。ヒトが「考える」という事はすなわち「言葉の問題を考える」事に

等しいと言える。実際に多くの哲学者や宗教にとって「言語が何たるか？」というのは大きなテーマであった。聖書がよく「まず言葉ありき」からはじまるのは周知の事実である。

また、言語は記号の体系と言い換えられる。同様に同じ記号の体系である「数学」とパラレルに問題を扱うことができる。実際、言語学のある分野では数学を「形式言語」、ヒトが話す言葉を「自然言語」として、同じ「言語」の枠組みにくくる事もある。大雑把にいうと、言語学は「数学（集合論）」「論理学」「生物学（遺伝学）」「医学（神経学）」「心理学」「社会学」「哲学」の領域と密接な関連をもっている。

言語学の定義とは、「ヒトが話す言語」とは何かを明確にする学問であるが、学者らによる「言語」の定義の問題は未だに決着していない。一般的には人類の言語の構造、変遷、系統、分布、相互関係などを研究する科学である。人間が話す言葉を音韻・形態・文法・意味・運用の各レベルにおいて科学的に研究する学問である。

言語学の主要な研究分野は、音声学（ヒトの言語の音声の研究）、音韻論（音韻体系の研究）、形態論（語構造の研究）、統語論（文構造の研究）、談話分析（語の成り立ちは形態論で研究し、語が他の語と結合して作る構造は統語論で研究する。統語論が研究対象とするのは文までで、それ以上のテクストや会話などは談話分析で扱う）、意味論（ 意味の研究）、語彙論、語用論（意味論が研究対象とする「意味」とは、伝統的に、話者や文脈・状況を捨象した普遍的な語の意味や文の意味に限られてきた。話者の意図は意味論の研究対象ではないと見る場合の研究は語用論で行う）などの下位分野である。

関連分野には、応用言語学、文体論、対照言語学、言語類型論、心理言語学、計算言語学・コンピューター言語学、比較言語学、社会言語学、神経言語学、言語人類学、民族言語学などがある。

言語学の研究方法には、比較言語学、構造言語学、機能言語学、認知言語学、言語地理学、コーパス言語学などのアプローチがなされてきた。それらに対してどのような視点で解明を進めていくのか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はかなりアプローチが異なっている。歴史的な観点から言えば、機能言語学→生成文法→認知言語学の順に発展してきて、それぞれが現代の学会において研究勢力を保っている。

1.2 比較言語学

比較言語学（comparative linguistics）は歴史比較言語学ともいう。百科事典や百科全書には次のように解説されている。

歴史言語学の一大分野である。比較文法（comparative grammar）ともいう。これは任意の言語を比較対照してその異同を論ずるのではなくて、それらの言語が同じ源から分かれた同系の一族であるかどうかを言語学的に検討し、また同系で互いに親族関係にある言語の比較によって、それぞれの言語の歴史において文献的に実証のない空白の部分を理論的に埋め、それによって言語史のより合理的な理解を深めることを目的とする。この学問は18世紀末にヨーロッパでおこった。

通時言語学の一つの分野で、個々の単語などの語源を追及する分野を語源学と呼ぶ。同一の言語から分岐して成立した複数の言語（方言）の比較によって、もとの言語（祖語）の姿を推定（再建）したり、分岐の過程を推定したり、あるいは、同一の言語から分岐した可能性のある複数の言語を比較して、それらが同一の言語から生じたこと（系統的親近関係の存在）を証明しようとする分野を比較言語学と呼び、そこで用いられる方法を比較方法と呼ぶ。音韻変化がおおむね規則的であることが最もよく利用される。（『世界大百科事典』第2版）

同系関係を確立するために、複数の言語をつき合わせて共通祖語を再建する、歴史言語学の一分野である。19世紀にインド・ヨーロッパ諸語で実践されてから一躍言語学における主要な方法論の一つとなる。音韻対応の法則性を発見することが鍵となる。（『大辞林』第3版）

共通の起源を有する諸言語を比較することによって、それらの相

似・異同の関係を歴史的・発生的に考察する言語学の一部門である。歴史比較言語学ともいう。起源を同じくする諸言語を同系語、その源となった言語を祖語または共通基語、そしてこのような同一の祖語から分岐した（と想定される）諸言語の総体を語族と呼ぶ。従来の言語の分類は、多くの場合、このような語族に基づいて行われている。たとえば、インド・ヨーロッパ（印欧）語族、ウラル語族、アルタイ語族、ハム・セム語族、バントゥー語族、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族などである。ラテン語はギリシア語やサンスクリット語などとともに印欧語族に属するが、スペイン語、フランス語、イタリア語などのロマンス諸語はこのラテン語を祖語とし、そこから分岐した別個の下位語族を形づくる。同系語のもっとも大きな群を語族、それの下位群を語派とよぶことがあるが、同系関係に基づく言語群にはさまざまな段階がありうる。

ロマンス語に対するラテン語のように、祖語が判明している場合はむしろまれで、多くは失われて伝わらず、したがって諸言語の同系関係は理論上の推定にとどまることが多い。しかし、言語の変化はけっしてでたらめではなく、高度の規則性に支配されており、同一の言語から分岐した同系諸言語の間には、音韻、形態、語彙の各面において規則的な類似現象が認められる。このような現象を対応と呼び、とりわけ音韻の対応関係には著しい規則性が現れ、これを音韻対応の法則、または単に音法則と称する。歴史言語学のもっとも基本的な手段とされる比較方法とは、このような同系言語間に観察される対応の規則性をよりどころとして、失われた祖語を再建し、この推定上の祖語と関連づけることによって、問題の諸言語間の関係を歴史的つまり通時的に明らかにする説明方式であり、この方式による同系諸言語の記述を比較文法という。近代の言語学は19世紀の初頭に誕生した「印欧語比較文法」によって始まり、この分野で研究上の方法や諸原則が確立され、整備された。以来、比較方法は他の多くの語族にも適用され、それなりの成果をあげている。ただし、この方法は、あくまでも同系関係が前提とされる諸言語に適用

されて初めて有効に働くのであって、この関係が不明の場合や、またかりに同系であっても、その関係が非常に遠いために対応の規則性が発見できないような場合には、その適用はほとんど無効である。比較方法は、言語の系統関係そのものを究明するためのものではなく、それを対象とする研究は別に言語系統論と呼ばれる。

また、人類言語の多様性と類似性を生み出した諸要因は、かならずしも同一起源からの分岐的な発達だけによるものではない。系統を異にする諸言語が同一の地域で長期にわたって相互接触を続けた場合、それらの諸言語の間に著しい共通特徴が発達することがある。このような地域的な諸特徴を共有する一群の言語を言語連合または言語圏と称する。言語変化の地理的な伝播に基づくこのような収束的発達に対しても比較方法は適用できない。このような現象を取り扱うのは言語地理学や地域言語学の役目である。また、系統的関係を顧慮することなしに諸言語を比較考察し、それらの類型化や人類言語の普遍性を究明する分野として言語類型学、特定言語の個別的特徴の研究に重点を置く対照言語学などがある。

1.2.1 グリムの法則（研究方法の１つ）

ドイツの言語学・説話学者ヤーコプ・グリム（Jacob Grimm）がたてた、古典語とゲルマン語の間にみられる子音対応に関する規則である。印欧基語とゲルマン基語の閉鎖音と摩擦音において、無声・有声・帯気音の間に次のような子音の推移がみられる。

(1) 印欧基語の無声閉鎖音［p、t、k］がゲルマン基語では無声摩擦音［f、θ、x→h］となった。ラテン語の **p**iskis「魚」、**t**enuis「薄い」、**k**aput「頭」の語頭音が英語の fish［**f**iʃ］、thin［**θ**in］、head［**h**ed］の語頭音に対応する。

(2) 印欧基語の有声閉鎖音［b、d、g］はゲルマン基語では無声閉鎖音［p、t、k］に変化した。ギリシア語の kanna**b**is「麻」、ラテン語の **d**uo「二」、**g**enus「種属」は、英語の hem**p**、**t**wo、**k**in「親族」にあたる。

(3) 印欧基語の帯気音［bh、dh、gh］はゲルマン基語では無帯気音［b、d、g］に推移した。サンスクリット語の **bh**arāmi「私は運ぶ」、ma**dh**u「蜜（みつ）」、stig**h**noti「彼は登る」は、英語の I **b**ear、mea**d**「蜜酒」、ドイツ語の steigen［∫taigen］「登る」に対応する。グリムは、無声摩擦音［f、θ、x］と帯気音［bh、dh、gh］を気音群 A に、無声閉鎖音を硬音群 T に、有声音を軟音群 M に分類したうえで、下の図式（図 1.1）により推移の法則を表すことができるとした。グリムの法則によって、同系統の言語の間に音韻の対応が成立することが認められ、これに基づいて比較言語学の研究手段が確立された。さらに、同一系統の言語の語形を比較対照させることにより、その原形を推定することができるようになった。（小学館『日本大百科全書』）

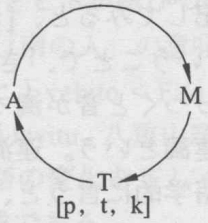

図 1.1　推移法則図

1.2.2　内的再構法（研究方法の１つ）

内的再構（internal reconstruction）とは、比較言語学・歴史言語学において、同じ系統に属する言語間の比較によってではなく、その言語内のある時点での形の分析から、その言語の記録以前の形を推定し、これを構築する働きかけのことであり、また方法のことである。内的再建法ともいう。祖形から祖語へ遡る調べ方の研究方法の１つである。

内的再構では異形態の分析が重要な役割を果たすことが多い。比較方法では説明のつかない問題が内的再構によって解明されることがある。その一方で、内的再構はその言語の先史を部分的に明かにするだけで、比較方法のように祖語を体系的に再建することはできない（吉田 1996）。

1.2.2.1　日本語における内的再建の例

（1）例 1　以下の表 1.2 が示したような日本語の語群から、規則性を見出すことができる。

表 1.2　異形態対応

木（き[**ki**]）	焚き木（たきぎ[taki] [**gi**]）
戸（と[**to**]）	網戸（あみど[ami] [**do**]）
葉（は[**ha*pa**]）	落ち葉（おちば[ochi] [**ba**]）

（※推定形にはアスタリスク*を付けるのが言語学の慣例である。）

この語群から注目するところは同じ形態素の音である。形態素を[ ]でくくって、ひらがな表記してみると、[き]→[たき][ぎ]、[と]→[あみ][ど]、[は]→[おち][ば]ということで、「き（木）」「と（戸）」「は（葉）」という語は、別の語とくっつくと音が濁って「ぎ」「ど」「ば」になる。このような現象を、連濁という。連濁は日本語で非常に頻繁に見られる現象である。言語学的に言うと、連濁は音が無声から有声へと性質を変える現象であり、有声音と無声音の交替であると言える。さらに、ある形態素に別の形態素がくっつくことで交替が生じるので、形態音素交替と呼ばれる現象の一つである。

ローマで字表記すると、[ki]→[taki] [gi]、[to]→[ami] [do]、[ha]→[ochi] [ba]というように対応している。つまり、複合語をつくると規則的に濁音になる。しかし、さらにこれを「音素」の観点で見ると、k→g、t→d、h→b という対応をしている。すなわち、「無声音」の k t h と「有声音」の g d b とが対応している。さらに調音点についても、k、g は軟口蓋であり、t、d は歯茎であるので、調音点を同じまま、有声音と無声音とが対応している。しかし、h と b については、調音点が一致していない。h の調音点は声門であり、b の調音点は両唇である。

ここで、比較言語学の基本主張である「現在は不規則だが過去には規則的だった」という考え方を採ってみれば、つまり、現在は調

音点が一致していないが、過去には調音点が一致していたと考えられる。このような考え方は「構造主義」と呼ばれる。過去には調音点がともに両唇であったと想定してみれば、つまり、現在の「葉」の h の音は、過去には p の音であっただろうと考えられる。すなわち、過去には ki→gi、to→do、*pa→ba のような対応であった。

これで過去の整った体系を推定することができた。したがって、音変化の法則としては、*p>h になる。これが内的再建の考え方である。この内的再建は、言語の過去の姿を明らかにする比較言語学の中心となる手法である。

（2）例2　日本語の「隼人」の読み方[2)]。

「隼人」の読み方として、ハヤ・トの他、ハヤ・ト、ハヤ・ヒト、ハイ・トもあり、ハイ・ハエとヒトが結びついて、ハヤトになり、（ハイ＋トからハヤトへの転化）「南の人」の意味であるとされている。

なお、人の「ヒト」はヒト→hito < Fito < pito（ヒトの古語）と変化したものであり、沖縄語 hwitu、八重山語 pitu、北海道アイヌ語 pito と残っていることが日本語の変化を正しく伝えている。ヒトのもとは「ピ」と「ト」との合成である。

1.2.2.2　内的再建による Q/N の挿入

促音（Q）と撥音（N）が同一の音素から生じた二つの具現形である[3)]。

促音と撥音の間に相補の関係が観察されるのは主として語と語が組み合わされる派生の環境において発生するということになる。このような環境の下にある促音と撥音を1つの音素から生じた二つの具現形、すなわち異音であると主張する。また、ここで問題にしている促音と撥音はいわゆる二重子音の最初の子音として現れることから、この音素を/Q/と設定する。/Q/は一般的には促音をさす記号として用いられるが、一方で二重子音の第一要素という意味もあるので、音素に適合した記号と考えられる。

複合語を形成する際に二重子音が生じた場合、その最初の音の音素は/Q/であり、その/Q/が後ろの子音の性質によって促音になったり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com